

ひきこもりの子どもを持つ父親の困りごとについての一考察
－ インタビュー調査をもとに －

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター
高本淑枝

子どもが、自宅または自室にこもったまま、人との交流や社会参加をしないことをひきこもり状態と言うが、その数が増加の一途をたどり、社会問題となって久しい。その子どもがもはや子どもとは言えない年齢になるに従って、親の不安も増大し、疲弊しきっていく現状を筆者は見てきた。そこで、本研究は、ひきこもりの子どもを持つ4名の父親を対象に、彼らの困りごとに着目し、その困りごとに対する向き合い方やその対処の仕方について調査を行った。そして、父親の困りごとがどのようなプロセスをたどり、変化するかを明らかにすることを目的とした。方法として、半構造化面接を行い、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）にて分析を行い、6のカテゴリー、12のサブカテゴリー、22の概念が生成された。これらの関連からストーリーライン及び結果図を作成した。結果、父親自身に情報や知識が不足していたり、子育てに正面から向き合えていなかったという感情、子どもから危害を加えられる不安、世間の目に対する不安などが、困りごととして明らかになった。また、父親自らの高齢化や時間的限りが見えてくることによる焦りから、「早く引き出して欲しい」という願いを持っていることなどが父親の求めていることとして明らかになった。以上から、今後は、ひきこもりに対する社会の理解が進み、父親も含んだ家族支援の構築が求められていることが示唆された。

キーワード：ひきこもり、父親、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ